

続・ 珈琲の思い出十

私が和樹と初めて会ったのは、私が勤務する駅前の書店の中だった。小さい子ども向けの絵本のおはなし会に和樹が息子の佑樹君を連れてきたのだ。

店の2階にある子供の本コーナーに10組ほどの親子連れのお客様が集まり、私がおはなし会の絵本の読み手だった。開演直後、一人の男性が息せき切つて、階段を駆け上がった。黒いダウンジャンパーに身を包んだ背の高いその男性を一目見た瞬間、私は心臓が止まりそうになった。

—なんだ、こんなところにいたんだ！約束通り、私をちゃんと迎えに来てくれたんだ。私の愛しい人……。—

本番で、絵本の読み聞かせをしている真つ最中であるにも関わらず、私の目は彼に釘付けになった。

と、その直後、同じような黒いジャンパーを着た、さきほどの男性にそっくりな小さな男の子がニコニコしながら、彼の後を追って階段を上がってきた。

その瞬間、私の心は凍りついたような感覚にとらわれた。絵本のおはなし会である。大人の男が一人で聞きにくるようなところではない。子供がいて当たり前なのだ。子供がいる、ということは当然ながら妻がいるということか……。私は自分にも夫がいるくせに、そんなことを思つて、心の底から失望した。

それからというもの、毎月第4土曜日の絵本のおはなし会がくるたびに、彼が来てくれないかと心待ちにするようになった。彼によく似た目をキラキラ輝かせてお話に聞き入ってくれる彼の息子の名前が佑樹であるということもやがて知るようになった。(続)